

家族や地域、企業などの組織や集団には、目には見えないが、皆が了解している特有のしきたりや慣習、つまり一種の「ルール」が存在します。その良し悪しや好き嫌いは別として、これらのルールを理解し、守ることは、集団に属して生きる人にとって必要不可欠なことでしよう。

例えば、家族を例に挙げると、家にとどまるときに靴を並べたり、食事の前に「いただきます」と挨拶をしたりすることが挙げられます。

さて、このような種々のルールを伝えようとするのを「教育」と呼ぶ場合、家族社会学という学問では、四つのアプローチが見出せるとされています。

その一つは「しつけ」です。例えば、ある家族に新たに子供が生まれたとします。親はその子に食事の仕方や衣服の扱い、排泄のルールなど、生きるために必要な様々な生活上のルールを意図的に教えます。子供もそれを精一杯身につけようとしますが、これを「しつけ」と呼びます。

一方で、親が意識していないのに、子供が積極的に親の行動を真似て身につける場合があります。このような教育作用を「模倣」といいます。例えば、子供が親の口癖や振る舞いをそっくりそのまま真似ることが典型的な例です。

また、子供が意図していなくても、親の強い思い（願い）が伝わる場合があります。これを「感化」といいます。子供には教えられていないのか、真似しようといった意識



自分自身を磨くことが 「薫化」実現の土台となる

はないが、自然に影響を受けてしまう場合をいいます。

最後に、親も子供も意図することなく教育的な機能が発揮されることがあります。これを「薫化」といいます。

親の日常の言動や家庭の雰囲気や「鏡」のように子供に投影されるというものです。親が子供を変えようとする意識をなくし、ひたすら自分自身の向上に努めるとき、自ずと子供にも好影響を与えることを指しています。

ここでは家族を例に挙げましたが、このことは、教育担当の先輩や上司と、教えられる後輩や部下など、職場にも当てはめることができます。大切なのは、教育にあたる者が四つの教育機能を駆使し、「薫化」を意識して、その根底に置くということです。

伝える内容に自信がなければ、そもそもしつけなどできません。模倣されるに足る自分自身であるか、感化に至る強い願いがあるかを問われることもあるでしょう。しかし、それはすべて教える側の自分磨きにつながります。そして、この自己錬磨は薫化を実現する土台にもなります。

教育にあたる者のレベルによって、受け手への浸透度合いが変わってきます。何かを伝えようとする者の願いと振る舞いが、移り香のように相手に伝わる時、家風、社風、会風といった、その集団独自の個性が形成されるのではないのでしょうか。

＊本文参考文献『新しい家族社会学』森岡清美・望月嵩著／培風館